

## 令和6年度第1回帯広市交通安全市民会議 議事要旨

1 日時 令和6年5月30日(木) 14:00~15:35

2 会場 帯広市役所10階第6会議室

3 出席者

(1) 委員 中馬 いづみ、塚本 俊二、池田 学、秋山 和仁、村岡 克己、  
高野 英樹、遠山 美津子、猪子 荘太郎、小野寺 正次、吉村 典子、  
内田 朋宏、堺 玄州、高倉 美恵子、中村 博明

(以上14名、敬称略)

※欠席委員 太田 義彦、佐藤 寛之

(以上2名、敬称略)

(2) 事務局 総務部長 廣瀬 智、危機対策課長 尾澤 琴也、  
危機対策課長補佐 今野 さゆり、危機対策課主任補 手塚 優人、  
危機対策課係員 工藤 明日美

(以上5名)

4 会議次第

(1) 開会

(2) 新任委員紹介

(3) 議事

令和6年度帯広市交通安全実施計画(案)について

(4) 意見交換

(5) 閉会

5 議事

<令和6年度交通安全実施計画(案)について>

事務局より説明。

北海道警察釧路方面帯広警察署より、北海道内の交通事故の発生状況等について補足説明あり。

○（帯広警察署）令和5年の交通事故状況について

昨年の北海道内の人身事故発生件数は9,082件、一昨年と比べ625件増。増加した背景には、新型コロナウイルス感染症の5類感染症への移行も関係していると思われる。死者数は131人、一昨年と比べ16人増。一昨年は115人であり、北海道の交通事故統計史上最も少なかった。傷者数は10,601人、一昨年と比べ816人増。

北海道十勝総合振興局管内の人身事故発生件数は560件。一昨年と比べ156件増。死者数は10人、一昨年と比べ3人増。傷者数は630人、一昨年と比べ184人増。

帯広市内の人身事故発生件数は366件、一昨年と比べ119件増。死亡者数は0人、一昨年と比べ3人減。傷者数は410人、一昨年と比べ148人増。全道的に人身事故発生件数は増加している。

今年の速報値（令和6年5月29日時点）では、北海道内の人身事故発生件数は3,577件、昨年と比べ45件増。死者数は30人、昨年と比べ2人減。傷者数は4,276人、昨年と比べ89人増。

北海道十勝総合振興局管内の人身事故発生件数は190件、昨年と比べ8件増。死者数は2人、昨年と比べ1人増。傷者数は200人、昨年と比べ11人減。

帯広市内の人身事故発生件数は121件、昨年と比べ3件増。死者数は0人、昨年と同数。傷者数は126人、昨年と比べ14人減。

帯広市内の最後の交通死亡事故は令和4年9月27日に起きた、自転車走行中の女性が自動車にはねられたもの。北海道十勝総合振興局管内では、昨年3月8日、中札内村にて歩行者が道路横断中に車と衝突し死亡する悲惨な事故や、今年4月26日に芽室町、5月2日に幕別町で交通死亡事故があったことから、引き続き交通事故の取り締まり活動や、広報啓発活動を推進していきながら、事故の抑止を目指したい。

意見・質疑応答あり 以下主な要旨

○計画（案）2 交通事故の発生状況の推移の中の、令和5年の帯広市の数値について、死者数は0であるものの、発生件数や負傷者数は令和元年に比べ増加している。北海道内で見ると発生件数は令和元年に比べ減少している。帯広市だけ増加した要因は何かあるのか。  
→はっきりとした要因は不明だが、交差点での事故や、自転車・歩行者・バイクが絡む事故が増加傾向にある。新型コロナウイルス感染症の流行が落ち着き、人の流れが一気に増えたことで、スピードを出して走行している車両が多くなり、それに伴い事故の被害も大きくなるといえる。

○釧路市と比較したときに、十勝（帯広市）の方がインバウンド効果は大きいと言われて  
いる。帯広空港から釧路市や網走市などの各地へ旅行に行くなど。

十勝で外国人の交通事故は多いのか。

→データは持ち合わせていないが、特段外国人ドライバーの交通事故事例が多いとは感じて  
いない。

○大空学園義務教育学校のコミュニティスクール内で、子どもの自転車乗車時、ヘルメット  
の着用率が低いという話があった。帯広市でもチラシを配布し啓蒙されている話や、交通安  
全の指導教室内でも指導している話を聞いたが、着用率をもっと高くできないか。

→帯広市の取り組みとして、市内各中学校、高校、大学、専門学校にヘルメット着用のポス  
ター、チラシの配付や、市内各小学校での交通安全教室でヘルメットの実物を見せながら指  
導を行っているほか、市内各所での街頭啓発も行なっており、今後も引き続き啓発活動を行  
っていく。

○だんだんと日が長くなり、子どもたちが放課後や休校日に部活動等の練習しているところ  
を見かける。子どもたちの帰宅時間がちょうど退勤のラッシュと被っているうえに、当  
り前のように歩道を自転車で走行している。ヘルメットの着用による身の安全を指導する  
中で、逆に子どもたちが加害者になってしまう可能性があると思う。朝の通学の時間で  
あれば父兄が旗を持って立ってくれているが、帰りは無法地帯状態となっている。この  
ままであれば、被害者だけでなく加害者にもなる可能性がある中で、帯広市としてどの  
ような対策をお考えか。

→ヘルメットの着用に伴う啓発だけでなく、自動車も含め交通ルールの徹底が必要と考  
える。帯広市危機対策課は、帯広市交通安全推進委員連絡協議会という団体の事務局でも  
あり、協議会の方々と連携し、交通安全啓発や、学校への訪問を行い、啓発活動に努  
めている。

○小学生の子どもがおり、学校で交通安全教室や自転車の乗り方教室などを受けている。  
特に低学年の父兄は、啓発資料の隅々まで目を通して印象がある。何年生の父兄まで  
が啓発資料を見ているのか、具体的などころまでは分からないが、PTA団体や学校から  
父兄への呼びかけは交通安全の啓発として有効だと思われるため、親がそれに耳を傾け  
子どもに指導をしていくべきだと思う。

○帯広市は中学校まで自転車の乗り方をきちんと指導しており、4月の入学式後、自転車安全点検を終え、乗り方の指導を受けてから、初めて乗ることができることとなっている。ヘルメットの着用は努力義務であるため、強く指導はできないが、自分の身を守りたいと思っている子どもはきちんと着用している印象を受ける。中には、交通ルールを守らなかった子どもは1週間クラブ活動に参加できないといったペナルティを設けている事例も聞いたことがある。

○以前に高校生たちと会話する機会があり、なぜ自転車走行時にヘルメットを着用しないか聞いたことがある。そこでは、事故のリスクは重々承知しているが、ヘアスタイルが乱れる、ヘルメットが高すぎる、などの声が上がっていた。親や学校から、ヘルメット未着用は危険であるという教育を重々受けている一方で、それに従えない何か（ヘアスタイルが大事、ヘルメットは高い等）があるのも事実であることから、その状況を改善していかないと変わらないと思う。

○子どものヘルメット着用の有無については、親の影響が大きいと思う。子どもたちが集団でいる場において、先生や大人たちがヘルメット着用の呼びかけをしても聞き流すことがあると思うが、親が意識を強く持ち子どもへ着用を強制する形が増えていけば、着用率はあがると思う。また、ヘルメットを着用している人が並列走行や蛇行運転をしている様子はあまり見かけないため、車で横を通過する際は安心して追い抜かすことができるが、逆に着用していない人の横を通るときは怖いため、かなり距離を置くようにしている。この差については、きちんと親のしつけがなっているかどうかだと思われるため、保護者に対しても訴求効果が高い啓発活動を行うべきである。

○一つ目に、計画（案）4 令和6年度交通安全に関する事業について、「SNSを充実させた広報」とあるが、帯広市の公式ホームページ(以下HPという)内の機能の一つとして、Instagramへの投稿が直接帯広市HPに載る機能があり、広報活動を行う上では非常に合理的だと思った（Instagram内の投稿に#帯広市と付けると、帯広市HP上に投稿した写真が掲載される機能）。

二つ目に、計画（案）4-2 交通環境の整備の中で、先ほど外国人観光客の交通事故例はゼロではないと話があったが、十勝が今後、宇宙のまちづくりを進めていくことを見据えると外国語表記の規制標識を増やしていくことは一つの手だと思った。

三つ目に、運転する自分自身もそうだが、人は加齢と疲労により、視覚的な標識を見落とす可能性がある。そこで道路に音声アナウンスによる注意喚起物を設置できればより交通事故を減らせるのではないか。特に学校の周辺は規制標識だけでなく音声による注意喚起があれば、ドライバーとしても注意意識をより強く持つことができると思った。

四つ目に、ヘルメットの着用についてだが、私自身バイクに乗っていた経験があり、バイ

クのヘルメットは様々なデザインがある。努力義務である以上、着用率 100%とすることは難しいが、「格好いい」、「可愛い」のようなデザイン性の追求も着用の動機付けになるのではないかと思った。

→一つ目について、SNS を利用した各種お知らせについては、複数媒体で配信できればと考えている。

二つ目について、交通安全といった視点もさることながら、観光客を迎え入れる立場としても、多言語の構築は必要であると考え、観光部門にも情報共有していければと思う。

三つ目について、自動車の外側からの音声注意喚起は難しいかもしれないが、最近の新しい車には警戒アラーム機能が搭載されていることから、そのような技術進歩があれば事故防止に繋がっていくと思う。

四つ目について、ヘルメットのデザイン性についてはそのとおりであり、子どもにとってヘルメット着用の良い動機付けになると思う。

【意見二つ目に対する閉会後の追加回答】

外国人観光客をも含めた交通安全対策の視点は大事なことで受け止めている。

お話にあった「規制標識」は、国において厳格に様式が定められており、帯広市として独自に取り組めるものではないが、公安委員会や道路管理者以外の者が設置する案内看板のようなものであれば、帯広市や観光事業者等でも許可を得て設置することが可能であることから、貴重なご意見として観光部門と共有させていただく。

○小・中・高校生の自転車走行について、危険な思いをしているドライバーや歩行者が増えている一方で、高齢者の自転車マナーも危ういと思う。急な道路横断や暗い服装での夜間走行など多々見られるため、高齢者への啓発もしていただければと思う。警察官の取り締まりも日常的にあると思うが、帯広市からも子どもへの呼びかけと同様に、高齢者へも働きかけしていただければと思う。

→定期的に行っている交通安全教室の中には、高齢者を対象とした研修会も実施している。帯広市交通安全協会と連携し、市内自動車学校にて高齢者を対象としたドライビング体験会（高齢者の運転技術及び適正の確認を目的に、実際に運転を行うことやサポカーの試乗体験などを行う研修会）の開催など、高齢者の交通安全啓発に努めている。

## 6 意見交換

各委員より、所属団体で行なっている活動内容や、日頃の交通安全における意見等を交換。質疑なし。